

中国における非母語話者日本語教師教育の展開

「大平学校」と北京日本学研究中心

篠崎摂子・曹大峰

1. はじめに

阿部・横山（2001：23-25）によれば、海外の日本語教育は1980年代に学習者の急増と多様化を迎え、その後の20年間で定着した。そして、90年代後半には情報の蓄積や人材の育成が着実に継続され、日本語教育のインフラストラクチャーが整備されている。

中国においても、基本的にその状況に変わりはない。第二次世界大戦以前の日本語教育の経緯、文化大革命による停滞はあったが、1972年の日中国交正常化後、何度かの日本語ブームを経て、現在中国の日本語教育は成熟期を迎えていると言えるだろう。

また、阿部・横山（同上）は、80年代は多くの国の日本語教育が日本からの支援に大きく依存していたが、現在では、自国の非母語話者日本語教師が中心となって教師の養成や現職教師に対する研修を実施しているほか、日本語教育およびその関連領域を専門とする大学院の開設も進んでおり、専門性の高い人材を養成する基盤が整い始めている、と述べている。

この点に関し、中国の日本語教育で特筆すべきは、1980年に中国教育部と日本の国際交流基金の共同事業として在中国日本語研修センター（通称「大平学校」）が設置されて以来、現在の北京日本学研究中心に至るまで、国際交流基金の支援によって現地での非母語話者日本語教師教育が継続的に実施されていることである。そして、阿部・横山の指摘のように、日本からの支援に大きく依存していた「大平学校」の時代から、2005年9月の本格的な日本語教育研究者養成を目標とする大学院修士課程の設置まで、着実な発展を遂げてきている。

本稿は、「大平学校」設立25周年を迎えるにあたり、この中国における非母語話者日本語教師教育の展開を、そのコースの変遷から報告するものである⁽¹⁾。

2. 「大平学校」

「大平学校」は、1979年12月に当時の大平正芳首相が訪中し、中国側からの要請に応じて日本語教育の支援を約束したことに始まる。そして、翌1980年から中国教育部と国際交流基金の共同事業として、北京語言学院（現：北京語言大学）に日本語研修センター（中国名：日語教師培訓班）を設置し、中国全土37大学の日本語教師約600人全員に対する研修を、5年間（毎期1年各120人、全5期計600人）にわたって実施することになった。

研修の重点は、教師の「日本語運用力の向上」ならびに「言語理論と各専門領域の知識の向上」

に置かれ、文化大革命中に採用された現職教師の再研修を一斉に行うことが目標とされた。日本側からは講師の派遣と、教材・図書資料・機材の提供が行われ、参加者全員を1ヶ月の訪日研修に招聘した。

1980年8月から1985年7月までの5年間に、最終的に中国国内約160機関の日本語教師594人が参加した。日本からの教員の派遣は、佐治圭三氏が5年間主任を務めた他、著名な日本語・日本語教育学研究者や、若手日本語教師が参加して、のべ91人(長期・短期)に上った。研修の内容について、佐治(1987:14-15)は、5年間主任を務めた立場から以下のように述べている。

- (1) 日本語教師としての能力を高めることを目標として、日本語学、日本文学、日本事情の各領域から、できるだけ中国側の要求に応えるように学科目や講義の内容を組んだ。
- (2) 学年の始めのころは共通的な、基礎的な学科を配置、次第に選択科目を増やし、後期には、語学コース(文法・語彙コースと、発音コースに分かれる)と文学コースに分けるなど、それぞれの専門とする領域の力が付けられるように配置した。
- (3) どの期においても、研究会活動や、研究指導の時間を設けて、研究者としての能力を高めることができるようにした。

「大平学校」の修了生は、現在に至るまで中国の日本語教育および日本研究の中心的人材となっている⁽²⁾。

3. 北京日本学研究中心

3.1 設立の経緯と大学院修士課程

「大平学校」実施中の1983年、中国側より従来の「日本語研修」に加え、日本語・日本研究の「大学院修士課程」新設の要望が出された。それを受け、1985年に大平学校を発展継承する形で、北京外国語学院(現:北京外国語大学)に「在中国日本学研究中心(当時の名称)」が設立された。

当時中国には日本研究の大学院は例がなかったが、「大平学校」の経験に連なる言語・文学コースに加え、社会・文化コースを大学院修士課程(以下、修士コース)として設置した。同課程設置当時の目標は、「日本に関する専門知識を有する日本語教師(高級日語教師)」の養成で、開設当初の入学者には大平学校の修了生も少なくなかった。しかし、1990年からの第2次5ヵ年計画からは、「『高級日語教師』を超えた高レベルな『日本研究者』の養成」を目標として、現在に至っている⁽³⁾。

修士コースには、1985年から2005年までの20年間(20期)に415人が入学し、2005年7月現在329人(18期まで)が学位を取得している。修了生の多くが中国国内の大学の日本語学部・学科に就職し、中国の日本研究および日本語教育を支える人材となっている⁽⁴⁾。

3.2 日本語研修コース

北京日本学研究中心では、新しく修士コースを設置する一方で、「大平学校」以来の日本語研修コース（以下、研修コース）も、規模を縮小して継続実施されることになった。そして、1985年から1995年までの10年間は、「大平学校」と同様の1年コース（訪日研修1ヵ月を含む）で毎年30人が参加したが、1996年から2000年までの5年間は、半年コース（同上）参加者20人とさらに縮小された。最終的に1885年から2000年までの15期で、大学日本語教師395人が参加している。

半年コースになってからの1999年の「基本方針」には以下のように記されている。

- (1) 大学の現職日本語教師を対象とし、研修生自身の日本語運用力の向上と教授法の向上、及び現代日本事情に関する知識・情報の更新をめざす。
- (2) こうした実践的な側面以外に、日本語及び日本語教育を学問的研究対象とすること、日本の社会や文化を研究することなどの手がかりを与えることを目指す。
- (3) 研修生自身の日本語運用能力、教育経験、研究経験、本務校において求められる教育・研究のあり方などは多様であり、研修生の個別具体的な状況を考慮して研修を進める必要がある。

研修コースの参加者は、地方大学や非専攻日本語教育の教師が多く、主要大学の日本語専攻の教師が多かった「大平学校」とはやや傾向が異なっているが、各地の日本語教育を支える人材となっている。

3.3 在職日本語修士課程

2001年9月に「大平学校」以来の日本語研修コースを発展解消し、在職日本語修士課程（以下、在職コース）を開設することになった。これは、修士の学位を持たない現職の日本語教師向けに、1年間センターで教育を行い、その後の2年間で修士論文を作成して学位を取得させるというコースで、学部卒業後そのまま大学に残って教師となるケースが多い日本語教師のニーズに応えるものであった。

在職コース設置時の目標は、「高度な日本語能力を基礎とし、日中双方における日本語教育学、日本語学の成果を修得し、同時に日本への窓口としてふさわしい日本に関する総合的な知識・知見を有するとともに、その能力を教育現場において遺憾なく発揮する人材」の養成とされていた。これは言い換えれば「日本学の発展に貢献する日本語教師」の養成と言えるだろう。そのため、学生の研究テーマとしては、日本語教育学に限らず、日本語学、文学、文化等に関するものも想定されてカリキュラムが組まれていた。

しかし、初年度の学生全員が修論のテーマとして日本語教育学を選択し、今後の中国の日本語

教育の発展のために日本語教育の学問領域の確立が必要、という判断がコース内でなされたことから、2年目以降は「教師としての教授経験を生かした、実践的な日本語教育学を専門分野とする日本語教育研究者の養成」を目標に、カリキュラムの変更を行っている。

在職コースは2001年から2005年までに4期実施され、各期8名計32名が入学、2005年9月現在8名がすでに学位を取得している。また、在職コース設置と同時にセンター内に「日本語教育研究室」が設置され、プロジェクト研究や定例研究会が実施され、日本語教育研究の基盤が築かれた⁽⁵⁾。

3.4 修士課程日本語・日本語教育コース

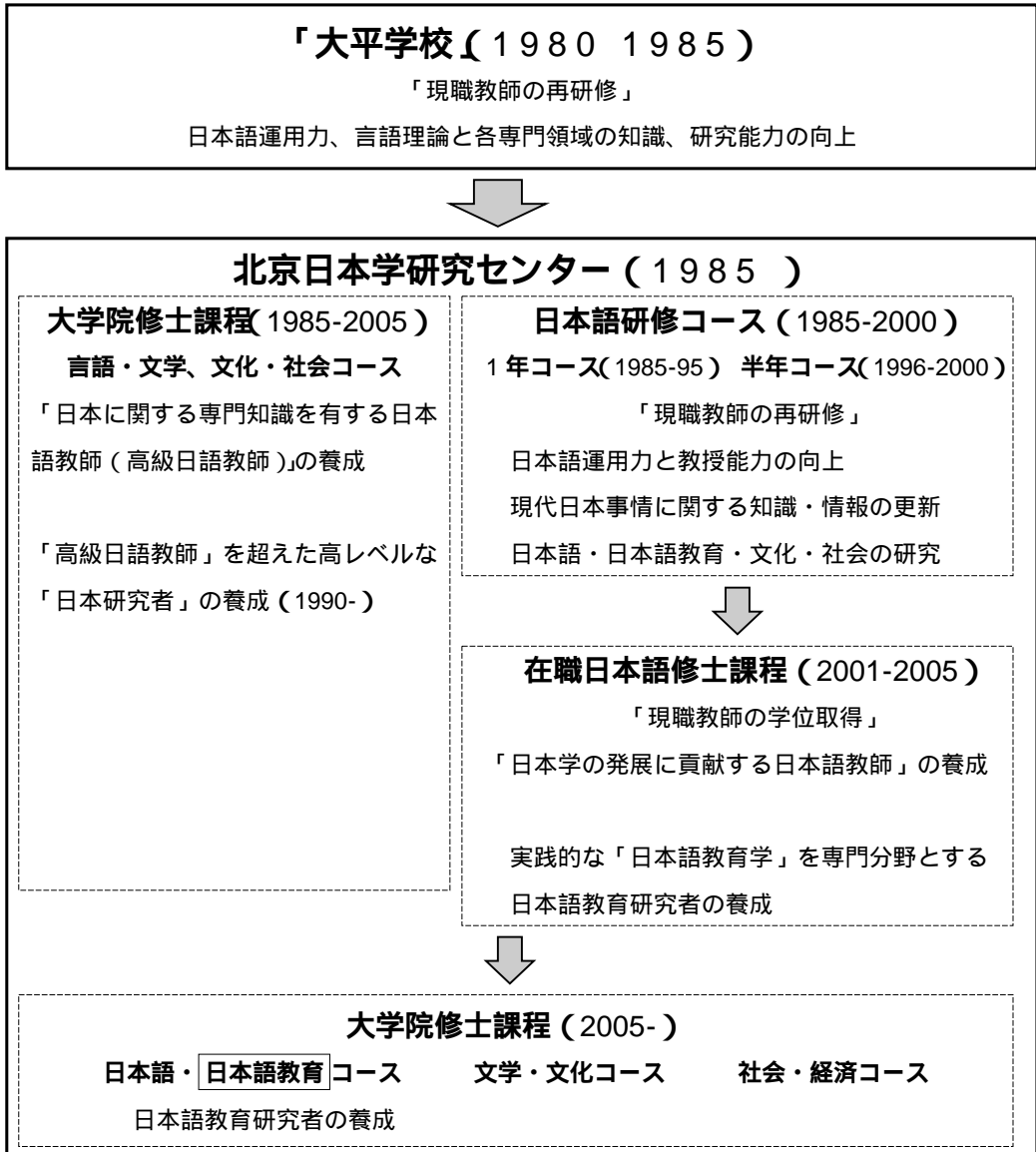
在職コースは、上述のように日本語教育研究者養成という新しい教師教育の方向性をめざしたが、2年目以降の応募者が伸び悩んだこと、参加者にとって在職修士の学位取得要件である日本語以外の外国語試験への合格がコース設置時の関係者の予想以上に大きな障害となっていること、さらに、本格的な日本語教育研究を行うためには在職コースよりも修士コースでの専攻設置が望ましいこと等を考慮して、2005年に4期を以って終了することになった。そして、在職コースを発展解消させる形で修士コースに日本語教育コース(専攻)を設置することになり、2005年9月から従来の修士コースが再編されるのに伴って、言語コースと統合されて日本語・日本語教育コース(以下、新コース)として再出発することになった。

新コースでは、統合コース内の専攻別の学生募集は行わず(コースの募集人員は8-12名)、3年間の在学期間の1年目は両方の専攻の授業に出席し、選択科目や研究テーマ選定の段階で専攻を決定することになっている。そのため、概論や基礎研究科目は、日本語学と日本語教育学の教員が1科目を半分ずつ担当する等の工夫がなされている。今後はこの新コースから、中国の日本語教育研究を支える人材が輩出されることが期待される。

4. コースの変遷

以上述べてきた「大平学校」と北京日本学研究中心のコースの変遷を図式化して、図表1に示す。

図表1 「大平学校」と北京日本学研究センターのコースの変遷



このように、「大平学校」と北京日本学研究センターにおける非母語話者日本語教師教育は、時代とともにその姿を変えてきている。今後は、各コースの教師教育としての特色と質的变化を詳しく分析し、中国の日本語教育への貢献についても検証する必要があるだろう。そして、この中国における事例をもとに、今後の海外における非母語話者教師教育の方向性と、日本からの支援のあり方についても考えていきたい。

〔注〕

- ⁽¹⁾以下の記述は、主に国際交流基金(2003、2005)に基づく。また、本稿執筆者のうち、曹は大平学校1期生で、2001年から北京日本学研究中心副主任、在職日本語修士コース及び新しい日本語教育コースの責任者を務めている。篠崎は、国際交流基金の派遣専門家として、1995、96年に北京日本学研究中心日本語研修コース、2003-2005年に在職日本語修士コースの授業と運営を担当した。そのため、それぞれの知見をもとに記述した部分もある。
- ⁽²⁾大平学校については、北京語言学院日語教師培訓班(1987)、莫(2005)等を参照されたい。
- ⁽³⁾北京日本学研究中心では、2000年の第4次5か年計画からは博士課程も設置している。
- ⁽⁴⁾北京日本学研究中心については、徐(2002)等を参照されたい。
- ⁽⁵⁾在職コースの詳細は、横山(2002)、篠崎・浜田(2005)を参照されたい。

〔参考文献〕

- 阿部洋子・横山紀子(2001)「第1章教育改善：日本語教師に求められたもの・求められるもの 2 海外の日本語教育の視点から」『日本語教育年鑑2003年版』23-33
- 国際交流基金(2003)『北京日本学研究中心概要(2003年7月版)』
- (2005)『北京日本学研究中心概要(2005年7月版)』
- 佐治圭三(1987)「日本語研修センターの五年」北京語言学院日語教師培訓班『記念文集日語教師培訓班的五年』13-19、国際交流基金
- 篠崎摂子・浜田麻里(2005)「非母語話者教師の日本語教育研究における研究課題の設定過程について 北京日本学研究中心在職日本語教師修士コースの場合」『国際交流基金日本語教育紀要』1号、69-83
- 徐一平(2002)「对中国特別事業 北京日本学研究中心」『国際交流』97号、94-98、国際交流基金
- 北京語言学院日語教師培訓班(1987)『記念文集日語教師培訓班的五年』国際交流基金
- 莫邦富(2005)「大平学校をご存じですか」『遠近』6号、15-20、国際交流基金
- 横山紀子(2002)「北京日本学研究中心・在職修士課程日本語教師研修コースについて」『日本語教育通信』43号 8-10、国際交流基金日本語国際センター